

「楽しくて力の付く授業づくり」

～新大分スタンダード R8改訂版～

大分県教育委員会では、平成26年に「学びに向かう力」と「思考力・判断力・表現力」の育成を目指した授業づくりの指針として「新大分スタンダード」を示しました。

授業づくりにあたっては、学校現場で長年大切にされてきた「不易」の取組や、経験年数に関わらず全ての授業者がきちんと押さえておくべき「基本」があります。

そこで、「不易」の取組・押さえるべき「基本」と本県の実情を踏まえて、現行の「新大分スタンダード」を見直し、「楽しくて力の付く授業づくり～新大分スタンダード R8改訂版～」として、まとめました。

本冊子に基づいた授業づくりにより、大分県内の多くの教室で「楽しくて力の付く授業」が展開されることを期待しています。

<目次>

- ▶ 「新大分スタンダード」改訂の経緯と要点 …………… 2～4
- ▶ なぜ単元構想が求められるのか？ …………… 5
- ▶ **単元構想を出発点にした授業デザイン** …………… 6～11
- ▶ **1 単位時間の授業づくり**
 - ・ ゴールの明確化と学びの道筋の想定 …………… 12～17
 - ・ 習熟の程度に応じた指導 …………… 18～19
 - ・ 板書の構造化 …………… 20～21
- ▶ **授業の充実を図るために**
 - ・ 生徒指導の3機能 …………… 22～23
 - ・ ICTの効果的な活用 …………… 24～25

令和8年3月
大分県教育委員会

「新大分スタンダード」改訂の経緯と要点

新大分スタンダード R5年3月版

「学びに向かう力」と「思考力・判断力・表現力」を育成するワンランク上の授業を目指して

1. 1時間完結型

- *学習の見通しをもたせ、意欲を高める「めあて」
- *学びの成果を実感し、学んだことや意欲・問題意識等を次につなげる「振り返り」
- *追究すべき事柄を明確にする「課題」、追究した結果を明確にする「まとめ」

2. 板書の構造化

- *思考を整理したり促したりする板書、思考の過程を振り返ることができる板書

3. 習熟の程度に応じた指導

- *「具体的な評価規準」に基づく確かな見取り
- *「努力を要する状況」の児童生徒に対する手立ての工夫


4. 生徒指導の3機能を意識した問題解決的な展開

- *各教科等の見方・考え方を働かせて展開する「課題設定 → 情報収集 → 整理・分析 → まとめ・表現・交流 → 振り返り・評価」等の学習過程の繰り返しの中で行われる
- *知識の関連付け、問題の発見・解決、情報を精査した考えの形成、思いや考えに基づく創造
- *様々な人との対話・協働による自分の考えの深化・拡充

育成すべき資質・能力を見据え、授業の「ねらい」に即したICT活用 子ども主体の学びを支援 情報活用能力の育成

ICTの効果的な活用

- *各教科等の特質や学習過程を踏まえた活用
- *子どもの学びを広げ、深める活動で活用(思考の可視化、意見交流、学習の記録等)
- *子どもの興味・関心、実態に応じた活用



左は、「新大分スタンダード」(R5年3月版)です。今回の改訂にあたり、市町村教育委員会や経験年数の浅い教員を直接指導する授業力向上アドバイザーなどから意見を聞いたところ、これまでの取組に対し、次のような成果や課題が出されました。

「新大分スタンダード」に係るヒアリングで出された意見

- 授業づくりのポイントが明確で、教職員が同じ方向を向いて授業を組み立てたり協議したりできる。
- 授業づくりの基本の視点が示され、経験年数の浅い教員は、授業の構想を練りやすい。
- ▲ 「新大分スタンダード」が授業づくりの本質的な視点ではなく、形式的な型として捉えられ、型(めあて・課題・まとめ・振り返り)を設定することが目的化している。
- ▲ 「1時間完結型」という表現から、授業づくりが1単位時間にフォーカスされ、単元構想に対する意識が低い。

「新大分スタンダード」の成果を引き継ぎながら、これまでの課題を改善するには、

① 授業づくりの本質的な視点は、資質・能力の育成であること ② 全ての先生に単元構想の大切さを示すことが必要と考えました。そこで、改めて、本県のめざす授業づくりのポイントを整理することにしました。

新大分スタンダード R5年3月版

「学びに向かう力」と「思考力・判断力・表現力」を育成するワンランク上の授業を目指して

1. 1時間完結型

- *学習の見通しをもたせ、意欲を高める「めあて」
- *学びの成果を実感し、学んだことや意欲・問題意識等を次につなげる「振り返り」
- *追究すべき事柄を明確にする「課題」、追究した結果を明確にする「まとめ」

2. 板書の構造化

- *思考を整理したり促したりする板書、思考の過程を振り返ることができる板書

3. 習熟の程度に応じた指導

- *「具体的な評価規準」に基づく確かな見取り
- *「努力を要する状況」の児童生徒に対する手立ての工夫

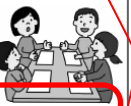
4. 生徒指導の3機能を意識した問題解決的な展開

- *各教科等の見方・考え方を働かせて展開する「課題設定 → 情報収集 → 整理・分析 → まとめ・表現・交流 → 振り返り・評価」等の学習過程の繰り返しの中で行われる
- *知識の関連付け、問題の発見・解決、情報を精査した考えの形成、思いや考えに基づく創造
- *様々な人との対話・協働による自分の考えの深化・拡充

育成すべき資質・能力を見据え、授業の「ねらい」に即したICT活用 子ども主体の学びを支援 情報活用能力の育成

ICTの効果的な活用

- *各教科等の特質や学習過程を踏まえた活用
- *子どもの学びを広げ、深める活動で活用(思考の可視化、意見交流、学習の記録等)
- *子どもの興味・関心、実態に応じた活用



① 単元を見通した授業改善のメッセージが伝わるように

② 効果的な「めあてや課題」とは？
※設定自体を目的化しない

③ 「1時間完結」の考え方が誤解なく理解されるように

④ ICTは授業の充実を図る手立てとして明確に区別

次は、現行の「新大分スタンダード」の改訂の要点を整理したものです。

新大分スタンダード R5年3月版

「学びに向かう力」と「思考力・判断力・表現力」を育成するワンポイント授業を目指して

1 4 生徒指導の3機能を意識した問題解決的な展開

3 *各教科等の見方・考え方を働かせて展開する「課題設定 → 情報収集 → 整理・分析 → まとめ・表現・交流 → 振り返り・評価」等の学習過程の繰り返しの中で行われる

- ・知識の関連付け、問題の発見・解決、情報を精査した考えの形成、思いや考えに基づく創造
- ・様々な人との対話・協働による自分の考えの深化・拡充

1_1 時間完結型

- *学習の見通しをもたせ、意欲を高める「めあて」
- *学びの成果を実感し、学んだことや意欲・問題意識等を次につなげる「振り返り」
- *追究すべき事柄を明確にする「課題」、追究した結果を明確にする「まとめ」

2_板書の構造化

- *思考を整理したり促したりする板書、思考の過程を振り返ることができる板書

3_習熟の程度に応じた指導

- *「具体的な評価規準」に基づく確かな見取り
- *「努力を要する状況」の児童生徒に対する手立ての工夫

授業を充実させる視点

1 ・授業づくりにおいては、資質・能力を育成するひとまとまりの「単元」をどのように構成するかを出発点に、各時間（1単位時間）を考えていく大切さが伝わるよう、単元の授業づくりに係るポイントを、最初に位置付ける。

2 ・単元構想が定まったら、それをより具体化していきながら各時間の授業づくりを行う。

・資質・能力を確実に育成するため、これまで大切にしてきた低学力層の児童生徒を意識した授業づくりに引き続き取り組む。

3 ・生徒指導の3機能は、単元づくりの基本となる考え方とは分け、授業の充実を図るための視点とし、別に位置付ける。

次ページ



「新大分スタンダード」の趣旨を一層分かりやすく示すとともに、これまでの課題も解消する新たな指針の提示

大分県がこれまで進めてきた「新大分スタンダード」の趣旨を引き継ぐとともに、各学校での実践が、児童生徒にとっても、学ぶことの楽しさや学んだことが役立つことを実感できるものであってほしいとの願いを反映したものが、「**楽しくて力の付く授業づくり**」です。

楽しくて力の付く授業づくり

～新大分スタンダード R8改訂版～

単元構想を出発点にした授業デザイン

1



- *単元(題材)を通して「どのような資質・能力を育成するのか」
- *単元を貫く学習課題やめあての設定と問題解決等の学習過程の工夫による主体的学びの創出
- *子どもが考える場面と教師が教える場面、個での学びと協働による学びの効果的な組み立て

1_ゴールの明確化と学びの道筋の想定

2

- *「何ができるようになればよいか」、そのために「何をさせるのか」
- *学習の見通しをもたせたり、意欲を高めたりする「めあて」や「課題」の設定
- *学びの成果を実感し、学んだことや問題意識等を次につなげる「まとめ」や「振り返り」の実施

2_習熟の程度に応じた指導

3

- *具体的な評価規準の設定・・・どのような子どもの姿があれば目標の達成と判断できるか
- *「努力を要する状況」の子どもに対する手立ての工夫

3_板書の構造化

- *思考を整理したり促したりする板書、思考の過程を振り返ることができる板書

授業の充実を図る生徒指導の3機能

4

(1)自己存在感の感受

授業中、自分が大切にされていると感ぜられるようにする。

(2)共感的な人間関係の育成

他者の意見や立場を尊重して考えることができるようにする。

(3)自己決定の場の提供

自ら考え、選択し、決定する等の経験ができるようにする。

1

- ・単元構想から1単位時間の授業づくりが流れるイメージ
授業づくりの出発点は「単元構想」というメッセージ

2

- ・各時間のゴールを明確にして授業に臨む必要性

3

- ・学びの状況を確実に見取るための具体的な評価規準

4

- ・個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の観点から、生徒指導の3機能は引き続き重要

なぜ単元構想が求められるのか？

「楽しくて力の付く授業づくり」では、1つ目のポイントとして「単元構想を出発点にした授業デザイン」を挙げています。資質・能力の育成には、単元構想は必要不可欠です。「単元」とは、「資質・能力の育成を目指し、教材や学習活動を関係付けながら実施する複数の授業のまとまり」のことです。授業づくりにおいて、単元構想が重要とされるのには、以下のような理由があります。

- ▶子どもたちが、学習内容を深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付けられようにするには、学ぶことに興味や関心をもたせたり、学ぶことの意味を実感させたりすることが必要。
- ▶子どもたちが、興味・関心をもって主体的に学ぶようするには、教師が一方的に教え込むような学習過程ではなく、じっくり考えたり繰り返し練習したりしながら、「わかった」「できた」を体得することが大切。



このような学びを1単位時間に詰め込んでしまうと、それぞれの活動が窮屈に詰め込まれることになり、結果として資質・能力の育成につながらない。



同様のことが、学習指導要領解説総則編にも示されています。

主体的・対話的で深い学びは、必ずしも1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して授業改善を進めることが重要。

(単元を見通した授業改善を考える観点の例)

- ◇ 主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するか。
- ◇ 対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか。
- ◇ 学びの深まりをつくりだすために、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか。

※上記は、第3章第3節「1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」をもとに整理したもの



単元構想を出発点にした授業デザイン

* 単元（題材）を通して「どのような資質・能力を育成するか」

「単元構想」においては、以下のような手順で授業をデザインしていきます。また、教師が、単元を通して育成を目指す資質・能力を意識することが求められます。

【単元構想】

1 どのような資質・能力を育成するのかを一層明確にする

- ☑ 育成を目指す資質・能力を、学習指導要領の記載（指導事項）と児童生徒の実態から検討
※各教科等の学習指導要領解説は、資質・能力について詳しく説明しています。該当ページの確認により、単元がイメージしやすくなります。

2 児童生徒が資質・能力を身に付けるために「何を・どのように学ぶか」をデザインする

- ☑ 資質・能力を身に付けるために、児童生徒が行う主な学習活動を検討
- ☑ 教材等の特性や児童生徒の興味・関心を考慮し、単元を貫く学習課題やめあてを設定

3 単元の指導と評価の計画に落とし込む

- ☑ ②で考えたことをもとに、各時間のつながりを意識しながら、教師が教える場面や身に付けた資質・能力を活用発揮する場面などを位置付けていきます。
- ☑ 各時間の学習活動と評価場面・評価方法を検討します。

4 1 単位時間の展開の具体を考える

なお、①～③は、単元を見通して行う「**深い教材研究**」があってこそ実現されるものです。



* 単元を貫く学習課題やめあての設定と問題解決等の学習過程の工夫による主体的学びの創出

社会科の例 B 世界の様々な地域(2)世界の諸地域 ⑥オセアニア

講義型の学習過程

■ 学習内容を伝え、地図で場所を確認し、自然環境について説明

- ・ オセアニア州の特色を理解する学習である。
- ・ オーストラリア大陸と太平洋に広がる島々で構成。
- ・ オセアニア大陸の約2/3は乾燥しており、温帯のニュージーランドや熱帯のパプアニューギニアなどがある。

■ 産業と貿易について説明

- ・ オーストラリアやニュージーランドは農業が盛んで輸出も多い。
- ・ 豊富な鉱産資源を輸出。
- ・ 以前はイギリスとの関係が深かったが、今はアジアとの結び付きを強めている。
- ・ さんご礁など、豊かな自然を利用して、観光業が盛んである。

■ 歴史について説明

- ・ かつてはヨーロッパが進出。アボリジニやマオリなどの先住民がいる。
 - ・ かつては白豪主義という政策がとられていた。現在は多文化社会を築こうとしている。
- 指導者がこれまで学んだことをまとめる。もしくは生徒にまとめさせる。

問題解決型の学習過程

■ 単元を貫く**学習課題**を設定

- ・ 日本の自動車企業がオーストラリアの自動車製造業から撤退し、2017年に自動車製造業が消滅した新聞記事を読ませ、疑問をもたせる。
- ・ **疑問や意見等を出し合い、単元の学習課題を設定する。**

「なぜ資源豊富なオーストラリアで、自動車製造業は衰退したのか。」

■ **課題解決の見通し**をもつ

- ・ 予想や仮説を立てる。
- ・ 調査方法、追究方法を吟味する。
- ・ 学習計画を立てる。(以下を調べる)
 - 1 地球上の位置や自然環境
 - 2 諸産業と貿易
 - 3 歴史と人々の結び付き
 - 4 これからのオセアニア州

■ 課題解決に向けて**調べる**

- ・ 地図帳を用いて調べる。
- ・ 端末を使い、自動車関連企業のHPや新聞記事等から調べる。
- ・ 自動車関連企業で働く人から聞き取る。

■ 社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察

- ・ **多面的・多角的に考察する。**
- ・ **話し合う。(討論等)**

■ 考察したことを**まとめる**

- ・ **学習課題を振り返って結論をまとめる。**
- ・ 結論について他の生徒と話し合う。
- ・ 学習課題についてレポートなどにまとめる。

■ 学習を振り返って**考察**

- ・ 自分の調べ方や学び方、**結果を振り返る。**
- ・ **学習成果を学校外の他者に伝える。**
- ・ **新たな問い(課題)を見出したり追究したりする。**



同じ学習内容(教材)でも、学習課題や学習過程をどのように設定するかによって児童生徒の学びが大きく変わります。そのことを意識して単元構想に取り組みしましょう。

問題解決等の学習過程を工夫し、効果的な資質・能力の育成につなげるには、それぞれの学習過程において、以下のようなポイントをおさえて展開をすることが大切です。

<学習課題の設定>

*主体的な学びとなるよう、単元を貫く学習課題やめあてを設定します。



ココがポイント!

☑ 学習課題は、児童生徒の主体的な学びを促すとともに、学習課題の解決を通して、教師のねらいが達成されるものであることが必要です。

※子どもが疑問に思ったこと全てが学習課題となるわけではない。



子どもの主体性の尊重と教師の指導性の発揮により学習課題を設定することが求められる。

<情報収集・整理分析>

*学習活動等に応じて、「個別最適な学びや協働的な学び」の視点やICTの活用を適宜取り入れながら、児童生徒に確実に資質・能力が育成されるよう、学習活動を工夫します。



ココがポイント!

☑ 情報収集や整理分析の場面では、調べ方等についても指導するとともに、身に付けたスキルを活用する場面を意図的に位置付けることも大切です。



ココがポイント!

☑ まとめや表現活動においては、どのような意見や考え等が表出されれば、資質・能力が身に付いていると判断するのかを、教師がより具体的にもっておく必要があります。

☑ 複数で活動を行い、グループで成果物を作成する場合には、個の資質・能力をどのようにして見取るのかを検討する必要があります。

* 子どもが考える場面と教師が教える場面、個での学びと協働による学びの効果的な組み立て

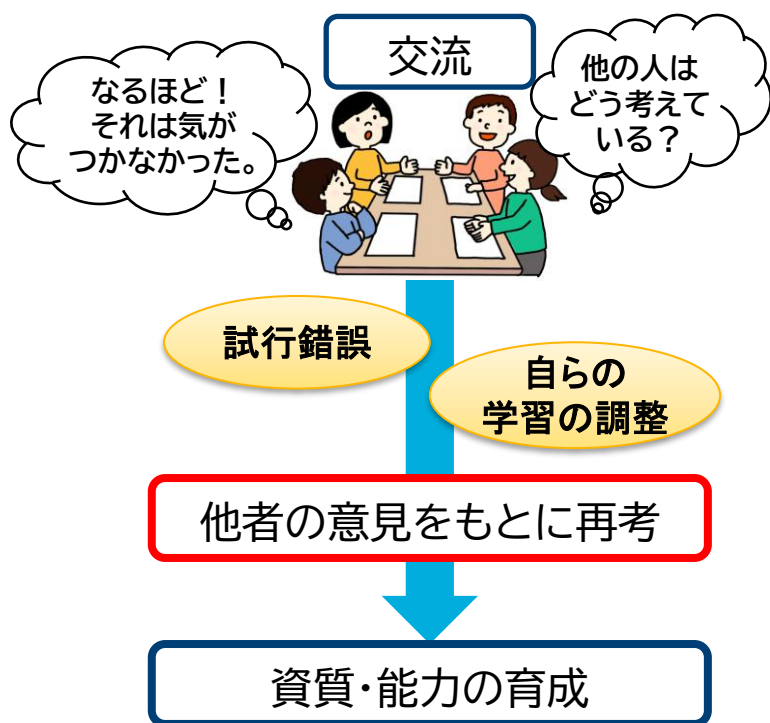
主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に当たっては、以下のような視点で学習過程の充実を図ることも必要です。



- ・ 個に応じた学習過程の工夫を行っていく上で、個別最適に学ぶ場面と協働的に学ぶ場面のそれぞれのよさを生かし、一斉・協働・個別といった学習場面を効果的に配置するなど、教師が必要な指導性を発揮する。
- ・ 「深い学び」を実現する上で、教師の一斉による指導も効果的に実施するとともに、児童生徒自身が自ら考え知識等を構成していく学びも大切にする。
- ・ 児童生徒が学習に前向きな見通しをもてるよう、単元計画等を教師が児童生徒に分かりやすく共有することや、単元の導入時に学習意欲を高める工夫を行うことも重要となる。
- ・ どのような教え方を選択した場合であっても、児童生徒に資質・能力を育成するために、教師による丁寧な見取りを行うことや子どものつまづきを予想した手立てを準備しておくことも大切である。

(※教育課程特別部会 総則・評価特別部会資料を参考に整理)

<資質・能力の育成を目指した交流の工夫>



交流などのグループ活動を行う際は、それ自体を目的化しないよう、「**何のために話し合うのか**」を、教師と子どもの双方が理解しておく必要があります。以下の例を参考にしてください。

- ▶ 意見を比べたり、折り合いを付けたりしながら一定の方向性を導き出す
- ▶ できるだけたくさんの考えに触れることで、各自の考えを広げる
- ▶ 他の考えを取り入れたり、参考にしたりすることで、自分の考えを深めたり、自分の考えを修正したりする

など

P6で示した「単元構想の手順」に沿って指導計画を作成する場合は、以下のように進めます。



<単元計画の作成手順> 国語科の例

Step1 単元で取り上げる指導事項（指導内容）の確認

- ・年間指導計画や児童生徒の実態等を基に、単元で取り上げる指導事項を確認します。
→指導事項の確認は、学習指導要領解説や指導書を参考にしましょう。

Step2 単元の目標を設定

- ・Step1で確認した指導事項をもとに、単元の目標（**どのような資質・能力を育成するのか**）を設定します。

Step3 単元の評価規準の設定

- ・評価規準は、目標の実現状況を判断する「拠り所」となるものを設定します。
※各時間におけるゴールを達成した子どもの姿は、単元の評価規準を各時間の内容に合わせて落とし込み、具体化したものであることに注意が必要です。

Step4 単元の指導計画と評価の計画の決定

- ・「指導と評価の計画」の作成では、どの時間に何を評価するのかについて、主たる学習活動の流れに沿って整理します。
→「指導と評価の計画」が整ったら、各時間に評価する内容が「単元の評価規準」に対応しているかどうかを確認することが大切です。
また、児童生徒全員の学習状況を記録に残す場面を精選するとともに、どのような方法で評価するのも確認しておきましょう。

Step5 評価の実際と手立ての想定

- ・それぞれの評価規準について、実際の学習活動を踏まえて、「Bと判断する状況」を具体的な子どもの姿で想定するとともに、「Cと判断する状況」の子どもに対する手立てを想定します。
→① いつ（学習場面） ② 何を（評価材） ③どのように（Bと判断する子どもの具体的な姿）

指導と評価の計画（例）

時	主な学習活動	指導上の留意点	評価
1	<p>○SDGsを題材にした意見文を読み、学習の見通しをもつ。</p> <p>○【単元を貫くめあて】「未来のために私たちにできることを考え、意見文にまとめよう」</p> <p>○日本ユニーセフ協会のウェブサイトへアクセスし、各自が取り上げたいテーマとそれに対する意見を考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> これまでの「書くこと」の学習を想起させ、学習計画を立てさせる。 自分たちが行動の主体であることを意識させて、取り上げたいテーマとそれに対する意見を考えさせる。 考えがまとまった生徒からエクセルシートに入力させ、共同編集機能により、互いのテーマを確認できるようにする。 	
2	<p>○意見文を書くために必要な資料及びその収集方法について考える。</p>	<p>第1時で扱った素材文を再読し、意見と根拠をマーカーで色分けさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 意見に対する根拠の書かれ方が異なる意見文を示し、根拠の示し方には様々あることや、根拠の適切さとはどういうことかについて考えさせる。 自分の意見を支える根拠には、どのような資料が必要かを具体的に考えさせる。 	<p>※指導に生かす評価（記録には残さない）として実施</p> <p>【知識・技能】 観察・ワークシート</p> <ul style="list-style-type: none"> ①マーカーで正しく色分けされているか ②根拠が意見の拠り所となるものであることを理解しているかを確認する。
3	<p>○意見とそれを支える根拠をワークシートに整理する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 意見を支える根拠として必要な情報を収集させ、ワークシートに整理させる。 グループで互いの意見が確かな事実や解釈から導き出されているかを検討させる。 グループ活動での意見を踏まえ、ワークシートを早直し改善させる。 必要に応じ、新たな情報の収集をさせる。 	<p>【思考・判断・表現】 ワークシート</p> <ul style="list-style-type: none"> グループ活動での意見を踏まえ、自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を見直したり説明を加えたりしているか確認する。
4	<p>○構成を考え、意見文（400字程度）を書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 前時に整理したワークシートをもとに、意見文の構成を考えさせる。 ワープロソフトを使って意見文を書かせ、意見と根拠を色分けさせて、根拠が適切かどうかを確認させる。 確認後、修正が必要な箇所については、見え消しで修正させる。 	<p>【主体的に学習に取り組む態度】 観察・意見文・ワークシート</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の意見が伝わる文章になるように、進んで、根拠や具体例が適切かどうかを見直そうとしているか確認する。 <p>【思考・判断・表現】</p> <ul style="list-style-type: none"> 根拠の適切さを考えて説明を加えるなど、自分の意見が伝わる文章になるように工夫しているかどうかを確認する。
5	<p>○互いの意見文を読み合い評価する。</p> <p>○単元を振り返る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 意見を支える適切な根拠が示されているかを相互評価の観点とし、意見文を読み合うようにさせる。 単元を通して、できるようになったことや今後の学習や生活で生かせそうなことについてまとめさせ、数人に発表させる。 	<p>【知識・技能】 評価シート</p> <ul style="list-style-type: none"> 他者の意見文を読み、観点到って評価しているか確認する。

- ☑ 基礎的・基本的な知識及び技能の習得に課題がある場合には、その確実な習得を重視すること
- ☑ 主体的に学習に取り組む態度を育成する観点から、児童生徒が自ら試行錯誤したり再検討したりする場を保障すること

単元計画作成の際には、各教科の特性を踏まえることも大切です。義務教育課のウェブサイトには、各教科の「早わかり！単元計画の作成手順」を掲載しています。そちらも参考にしてください。



一単位時間の授業づくり



ゴールの明確化と学びの道筋の想定

単元構想を出発点に、ここからは、1単位時間の授業づくりについて考えていきます。
各時間の授業づくりにおいて、効果的とされる方法の1つに「**逆向き設計**」があります。「逆向き設計」による授業づくりでは、まず、学びのゴールを明確にすることが求められます。

ゴールの 明確化

児童生徒はこの1単位時間で、
「何ができるようになればよいか」

- ・ 単元計画に基づき、1単位時間で育成された資質・能力を明確にします。あわせて、資質・能力が身に付いた児童生徒の具体的な姿をイメージする必要があります。
- ・ 学びのゴールは、「何を理解すればよいか」「どのような考え方を身に付ければよいか」なども想定されることに留意してください。

学びの 道筋の 想定

児童生徒がゴールに到達できるようにするために、
「何をさせるのか」

- ・ 本時で育成すべき資質・能力を身に付けさせるには、どのような学習活動が適切なのか、検討します。
- ・ 例えば、以下のような学習活動が考えられます。
 - * 解決方法を考えさせたり、結果を予測させたりする活動
 - * 集めた情報をもとに自分の考えを形成し、表現する活動
 - * 考えの伝え合いにより、多様な考えを理解する活動
- ・ 資質・能力の育成を目指し、学びの道筋を明確にするために「めあて」や「課題」、「まとめ」や「振り返り」を適切に設定します。
 - * 学習の見通しをもたせ、意欲を高める **めあて**
 - * 追究すべき事項を明確にする **課題**
 - * 追究した結果を明確にする **まとめ**
 - * 学びの成果を実感し、次につなげる **振り返り**



「楽しくて力の付く授業づくり」に示す「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」は、4つの要素全てが毎時間必要というものではありません。

各要素は、単元の指導計画に基づき、1単位時間の役割や位置付けを明確にして設定することが大切です。

めあて と 課題

例えば、単元を見通した「めあて」を設定し、本時の授業が開始される前からその「めあて」が子どもたちに意識されているのであれば、確認するだけでよい場合もあります。

また、「めあて」を設定した後、発問等によって「めあて」を具体化し追究する事柄を明確にしていけば、改めて「課題」として設定しなくてよい場合もあります。

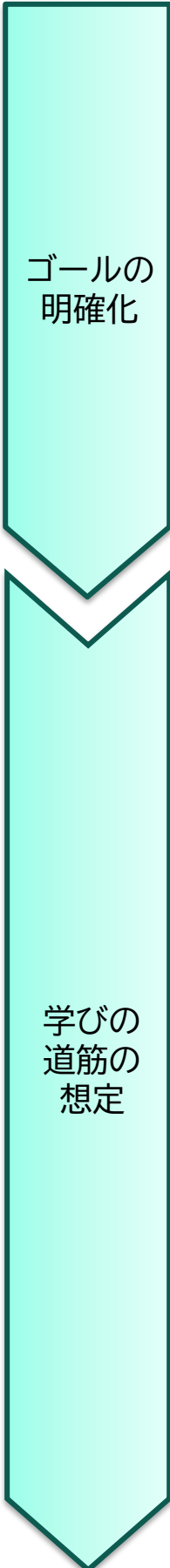
まとめ

「課題」を設定したときには、答えを明確にする必要があるので、「まとめ」が必要になります。ただし、多様な見方や考え方を求めるような授業などでは、1つに収束するような「まとめ」ではなく、いくつかの見方や考え方を整理するような「まとめ」となることも考えられます。

振り返り

1単位時間で設定される「振り返り」は、単元の指導計画における位置付けにより、短時間で行う簡潔な「振り返り」や時間を十分にかける「振り返り」等、さまざまな場合が考えられます。

<「逆向き設計」による授業づくり> 国語科(小6)の例



○単元構想に基づき、本時を組立て

【単元の目標】 目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとと(思・判・表)もに、事実と感想、意見とを区別して書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。

※(知・技)(態度)の目標は省略

<本時で身に付けさせたい資質・能力>

- ・自分の考えが伝わる書き表し方の工夫①②を理解する。
- ① 簡単に書いたり詳しく書いたりすると伝わりやすい
- ② 事実と感想、意見とを区別して書くと伝わりやすい

本時 (4/6) のねらい	自分が感じた作品の魅力やよさを伝える書き表し方について、二つの鑑賞文を比較して表現の工夫に気付かせることにより、まとめることができるようにする。
------------------	--

学習活動

- 前時に各自が作成した鑑賞マップを確認する。
 - ・発表をもとに、黒板に整理された鑑賞マップを確認し、自分の鑑賞マップの確認をする。
- 本時の課題を確認する。

【課題】 作品の魅力が伝わる鑑賞文にするためにはどうすればよいだろうか？
- 二つの鑑賞文(A・B)を提示し、どちらの鑑賞文の方が魅力やよさが伝わるかを、理由とともに考える。
 - ・比較する視点や理由の説明がうまくできない場合は、前単元で学習した『鳥獣戯画』を読む』の教科書のページやまとめたノートを振り返る。
 - ・鑑賞文と選んだ理由をグループで伝え合い、自分のものと比較する。
- 全体で考えを交流しながら選んだ理由を整理し、「鑑賞文を書くコツ」としてまとめる。

【まとめ】

 - ☑作品から読み取ったこと(事実)と感じたこと(感想や意見)は区別して書く
 - ☑特に注目してほしいところはくわしく書く
 - ☑魅力や感想にぴったりの言葉を使う
- 「コツ」を参考に、自分の鑑賞マップを色分けしたり加筆・修正したりする。
- 【振り返り】
次時に頑張りたいことを振り返りシートにまとめる。

・資質・能力の育成につながる課題の検討

・C層への手立ては？

・気付かない視点に気付かせるための手立ては？

・学びの結果を確認する「まとめ」

・次の学びにつながるような振り返り

※上の例では、【単元を貫くめあて】に沿って学びを進めているため、【本時のめあて】は設定していない。

<「逆向き設計」による授業づくり> 算数科(小4)の例

ゴールの
明確化

○単元構想に基づき、本時を組立て
 【単元の目標】面積の単位について理解し、長方形や正方形の面積を公式(知・技)を用いて求めることができる。
 ※(思・判・表)(態度)の目標は省略

<本時で身に付けさせたい資質・能力>
 長方形の面積について、 1cm^2 の正方形の数を基にして考え、縦の長さ×横の長さの求積方法の意味を理解する。

本時 (3/12) のねらい
 長方形の面積の求め方について、縦と横の辺の長さに着目し、 1cm^2 の正方形いくつ分であることを考えさせることにより、長方形の面積は縦×横で求められることを理解できるようにする。

学びの
道筋の
想定

学習活動	
1	めあて(前時と同様)を確認し、前時を振り返り、本時の学習課題をつかむ。 <ul style="list-style-type: none"> 前時に扱ったマス目がついている図形を提示し、面積(1cm^2の正方形いくつ分であるか)を確認する。 マス目がついていない長方形に出会い、どうすれば面積が求められるか、問題意識をもつ。
2	本時の課題を確認する。 【課題】マス目がついていない長方形の面積をどのようにしたら求められるか？
3	マス目のない長方形の面積の求め方を考える。 <ul style="list-style-type: none"> 長方形の縦と横の辺に1cmずつ線を引き、マス目を作り、1cm^2の正方形が縦と横にいくつ並んでいるか確認する。 「数える以外の求め方がないか」と、1cm^2の正方形が敷きつめられていることに着目し、縦×横の計算で求められるか試す。
4	全体で考えを交流し、長方形の面積の求め方をまとめる。 <ul style="list-style-type: none"> 数える求め方と計算での求め方の両方を発表する。 どうして長方形の縦と横の長さをかけると、長方形の面積が求められるのかを考える。 1cm^2の正方形を敷きつめた長方形の図を基に、ICTを活用し、考えを共有する。 【まとめ】長方形の面積は、 1cm^2 の正方形が敷きつめられているから、たての長さ×よこの長さの計算で求められる。
5	他の長方形でも計算で面積を求められるか確かめる。
6	【振り返り】 <ul style="list-style-type: none"> 本時で分かったこと、次時に考えたいことなどを振り返り、ノートにまとめる。

・資質・能力の育成につながる課題の検討

・C層への手立ては？

・ICT活用

・学びの結果を確認する「まとめ」

・次の学びにつなぐような振り返り

※上の例では、【小単元のめあて】を設定しているため、【本時のめあて】は前時と同様である。

「課題」や「振り返り」の設定を児童生徒の「主体的な学び」につなげるためには、以下のような工夫が考えられます。



「課題」の設定 ココがポイント！

課題の設定は、次のような観点から考えます。そのためには、**指導事項の正しい理解や児童生徒の実態把握**が必要です。

- ① 既習事項とのズレがある
→児童生徒が、疑問を感じるもの
- ② 意見の対立や拮抗が生じる
→児童生徒が、もう少し考えてみたいと感じるもの
- ③ 児童生徒が自ら解決するには、適度な壁がある
→児童生徒が、解決の見通しをある程度もてるもの
- ④ 児童生徒の素朴な疑問や驚き、憧れから生み出す
→児童生徒の興味・関心や意欲を高めるもの



「振り返り」の設定 ココがポイント！

個々の児童生徒の学びの状況について確認できる「振り返り」を工夫しましょう。

【例】

① 学習のプロセスや
成果を振り返る

- ・この学習で、何がわかったか。
- ・この学習で、何ができるようになったか。

② これまでの経験や
学習と関連付ける

- ・身の回りの事象や日常生活とどのような関連があるか。
- ・既習事項とどのような関連があるか。

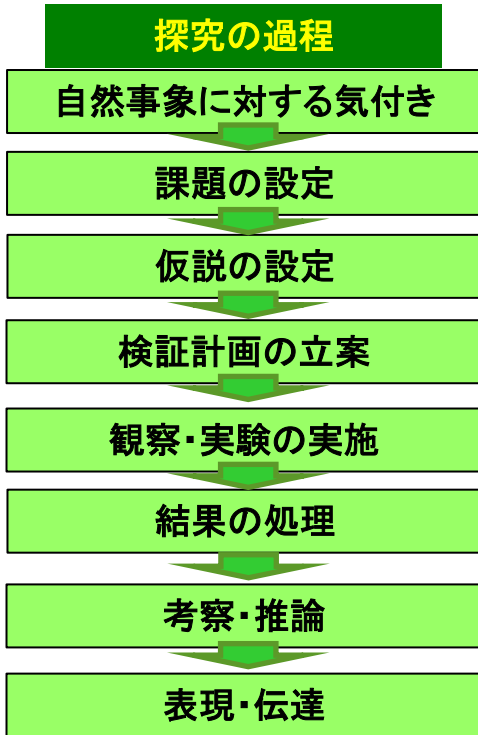
③ 次回の学びへつな
げる

- ・今後使ってみたい、もっと調べたいことは何か。
- ・改善には何が必要か。

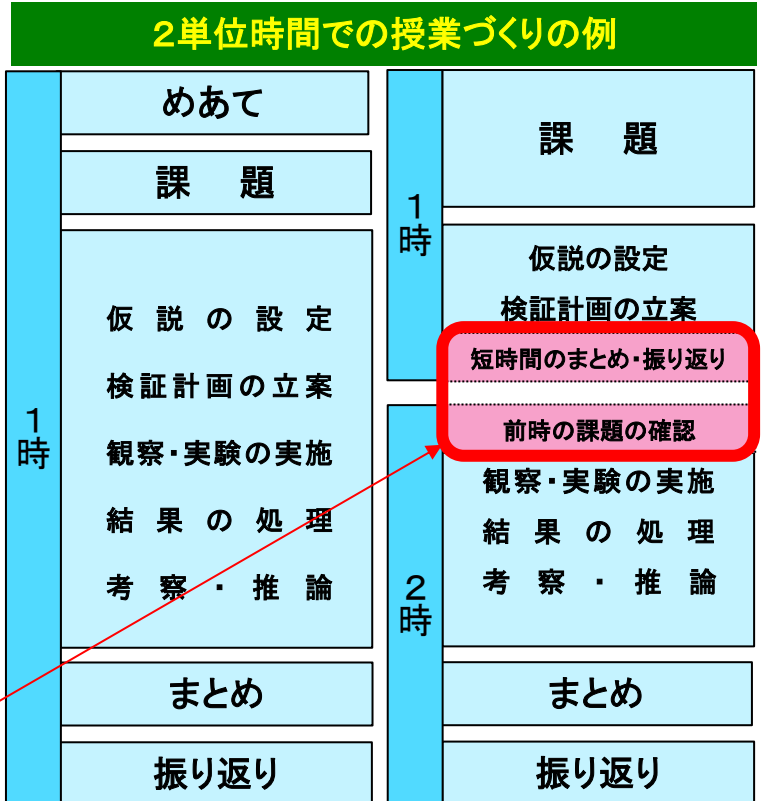


「主体的・対話的で深い学び」を実現するための「学びの道筋の想定」は、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の視点で見直すことも大切です。一人一人が個別にじっくり考えたり、互いの考えを生かしながら協働したりする時間の必要性に応じた計画を立てます。

<理科の例>



新たな疑問・次の問題解決へ



ココがポイント！

探究の過程を通した学びを1単位時間で計画するのか、複数時間で計画するのかは、授業者の指導のねらいによって変わってきます。それに応じて「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」の設定の仕方も変わります。

例えば、2単位時間で計画する際には、1時の終末は短時間で振り返ったり、2時の導入は前時から継続している課題を確認したりするだけでよい場合もあります。

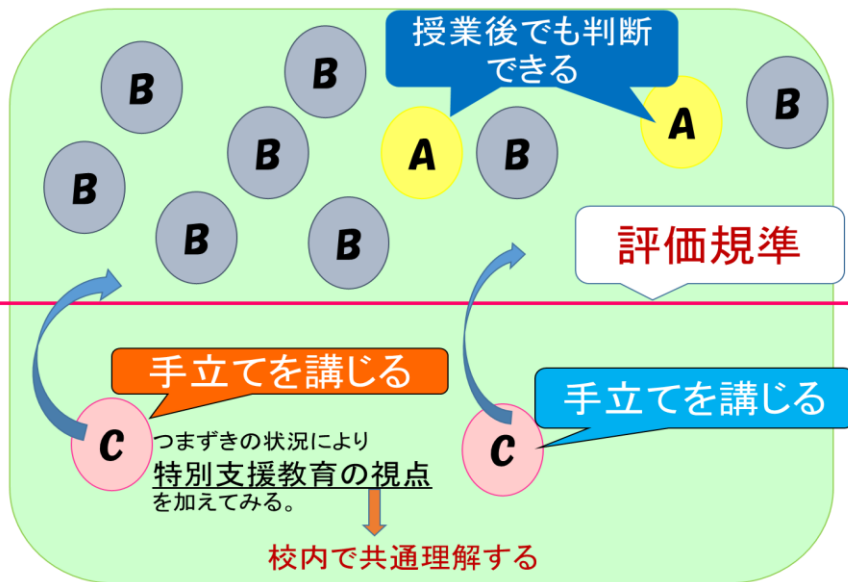
習熟の程度に応じた指導



* 具体的な評価規準の設定

…どのような子どもの姿があれば目標の達成と判断できるか

児童生徒に資質・能力を確実に育成するには、授業を通して「どのような学習状況になっていればよいか」を、教師が想定しておくことが不可欠です。各時間の評価規準は、単元の評価規準と本時の学習活動を踏まえたものを具体的な子どもの姿で設定します。



全ての児童生徒に、確実に資質・能力を育成するためには、具体的に設定した評価規準に基づいた**形成的評価**を適切に実施することが重要です。

※**形成的評価**では…
児童生徒の目標に対する実現状況を授業中に見取り、適切な手立てを講じることが求められます。

* 「努力を要する状況」の子どもに対する手立ての工夫



「習熟の程度に応じた指導」を充実させる観点から、以下についても確認しましょう。

- ☑ 形成的評価により、設定した評価規準への到達が困難と判断した場合には、該当の児童生徒に適切な手立てを講じたり、学習展開を柔軟に変更したりする。
- ☑ 「努力を要する子ども」への手立ては、児童生徒の思考・判断する機会を奪ったり学びを妨げたりするようなものにならないよう留意する。

<手立てのエラー例>

- ・教科書等にある言葉を書き写すだけのワークシート
- ・読んで確認するだけで、解答に誘引されるヒントカード



以下は、小学校国語科の例ですが、授業の中で、ある程度のまとまりのある文章を子どもたちに書かせることは多くの教科で行われています。児童生徒が表出したものを評価する際には、「ただ何かを書いていればよい」のではなく、「どのように書いているか」が重要です。

国語科の例

評価規準【思考・判断・表現】

「書くこと」において、**事実と感想、意見を区別して書く**など、**自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している**。

どのような内容を見取るかを**事前に設定し、それらを確実に指導した上で評価を実施**することが大切です。

【児童3が修正した下書き（「中」の部分）】
文化庁が行った「国語に関する世論調査」に、「漢字を用いた言い方と同じような意味で使われるカタカナを用いた言い方のどちらを主に使うか」を世代別に調査した項目があります。そこには、例えば、「アーティスト」という言い方を主に使う人もいれば、「芸術家」という言い方をする人もいるという結果が示されています。若い人の六十一・九％は「アーティスト」、七十才以上の人の七十五・六％は「芸術家」と言っているようです。七十才以上の世代は、この他にも、私たちが「リベンジ」、「アスリート」と言っている言葉を「雪辱（せつじょく）」、「運動選手」のような言い方をしていくことが多いという結果になっています。こうしたことから、世代によって主に使う言い方はちがうということが分かります。
また、世代によって同じ言葉であっても意味のとらえ方が変わることもありま
す。平成二十六年に行われた世論調査では、「やばい」の使われ方が取りあげられて
います。それによると、十六才から十九才の九十一・五％が「やばい」を「とても
すばらしい」という意味で使っています。しかし、五十才代以上は八十％以上が「と
てもすばらしい」という意味では使っていないという結果になっています。世代によっ
て、「やばい」という言葉の意味がちがうようです。

信頼できる資料から得られた情報が、割合などの数値を伴って示され、それに基づいて分かったことや考えたことが書かれている。

事実と意見を区別する文末表現

『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校 国語』を参考に例示
(国立教育政策研究所 令和2年)



板書の構造化

* 思考を整理したり促したりする板書、思考の過程を振り返ることができる板書

「構造的な板書」は、それをツールとして対話的な学びが生まれたり、そこから深い学びにつながったりすることが期待できます。

また、「自分の考えをまとめられない」「何を考えればいいのか分からない」などの児童生徒であっても、構造化された板書を手掛かりに、思考を整理したり促したりすることによって、自分の考えがもてるようになることもあります。



ココがポイント！

板書で大切なのは、「**児童生徒にとって必要なことが書かれているか**」です。

- 【例】
- ・めあてや課題など、何を学ぶのかを明確に示したものの
 - ・めあての達成や課題の解決に必要な材料
 - ・教科の資質・能力の育成に必要な知識や学び方
 - ・学習したことのまとめ

などが分かりやすく書かれているかを確認してみましょう。



「構造的な板書」の考え方は、黒板だけでなく、大型ディスプレイを使う場合にも当てはまります。ただし、大型ディスプレイは、一度示した画面が授業の最後まで残っていないことが多いため、例えば、めあてや課題は黒板に、課題解決に係る児童生徒の考えは大型ディスプレイに示すなどの工夫が必要です。



黒板と大型ディスプレイは、それぞれのもつ良さを生かして活用することで、児童生徒の学びを一層充実させることが期待できます。



▶ 1 単位時間を通じて…

本時の学習内容や見通しなど、児童生徒が1 単位時間の中で繰り返し確認するものを示す。

▶ 可視化による学びの効果

個々の考えをもとに、全体で整理したり練り上げていったりする学び等に効果的。



▶ 学習場面や状況に応じて…

見せたい時や見せたい部分を限定。(説明で使用する、取り上げる内容を焦点化し注目させるなど)

▶ 可視化による学びの効果

個々の考えなどを瞬時に共有できるため、他者の考えとの比較や資料を参考にする学びに効果的。



ココがポイント！

ICTは、低学力層の児童生徒を支える観点からも活用が期待されますが、以下のような授業になっていないか、注意が必要です。

▲ **活動のほとんどを端末上で行う授業**

→黒板に何も書かれておらず、授業の途中段階で「何を学んでいるか」「どのように学びを進めているか」を、児童生徒が確認できない。

▲ **電子黒板などで次々と情報が投影される授業**

→児童生徒が、必要なタイミングで大切なことを確認したいと思っても残っていない。

▲ **終末に全体でのまとめや振り返りがないまま、端末上で作成したもの（ワークシートや作文等）の提出で終わる授業**

→本時の学びのゴールが児童生徒にとって不明瞭で、何が正しいか（適切か）が分からないままになっている。



授業の充実を図る生徒指導の3機能

学校生活の大部分を占める授業の時間を、児童生徒にとって興味深い時間にするには、生徒指導充実の観点からも大切です。また、生徒指導の3機能を意識した授業づくりは、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を図るという視点とも重なります。



まずは、「生徒指導の3機能」について、確認しましょう。

自己存在感の感受

- ・自己存在感の感受を促進するためには、「個々の考えが大切にされる授業」「一人一人の努力やがんばりが認められる授業」など児童生徒の学びを支援できるように創意工夫することが大切です。
- ・そのためには、学習内容の習熟の程度や興味・関心を把握したり、学習上のつまずきの原因を捉えたりすることが大切です。その際、ICT端末の活用も有効です。

共感的な人間関係の育成

- ・共感的な人間関係を育成にあたっては、「間違いやできないことが笑われない授業」「自分の得意なところを発表しあう機会を提供する授業」「相手の立場に立って考え、相手に思いを伝える授業」になるよう、創意工夫することが大切です。

自己決定の場の提供

- ・自己決定の場を提供するためには、児童生徒に「意見発表の場を保障する」「対話や議論の機会を設ける」などにより、自ら考え、選択し、決定する等の体験の場を設定することが大切です。



ココがポイント！

令和4年12月に改訂された生徒指導提要には、以下のような記述があります。

(※一部省略)

<教科の指導と生徒指導>

- ・教科指導を進めるに当たっては、教科の目標と生徒指導のつながりを意識しながら指導を行うことが重要。
- ・教科指導の大半は、学級・ホームルームを単位とした授業により進められる。授業を進めるに当たっては、個々の児童生徒の習熟の程度など、その学習状況を踏まえた個に応じた指導に取り組むとともに、児童生徒間の交流を図るなど、集団指導ならではの工夫を凝らし、可能な範囲で生徒指導を意識した授業を行うことが大切です。

上記内容からわかるように、「授業の充実を図る生徒指導の3機能」については、単元や題材などの内容や時間のまとまりを見通した授業改善の中で、適切な位置付けを検討することが求められます。



生徒指導提要

令和4年12月
文部科学省

文部科学省

「生徒指導提要」(R4.12)では、生徒指導の実践上の視点として、これまでの「生徒指導の3機能」に加え、「安全・安心な風土の醸成」が示されています。これは、児童生徒が安心して授業や学校生活を送れる風土を作り上げることや教師による暴言や体罰が許されないことを意図するものであり、「授業の充実を図る」前提としてあるべきものと言えます。



ICTの効果的な活用

1人1台端末は、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を進める際にも有効です。個別最適な学びには「学習の個性化」と「指導の個別化」があり、協働的な学びとあわせ、以下に示すような視点でICTの活用場面を検討することが考えられます。

国語科の例

【育成を目指す資質・能力】（学習指導要領を基に作成）

- 比較や分類、関係付けなどの情報の整理の仕方、引用の仕方や出典の示し方について理解を深め、それらを使うこと。 [知識及び技能(2) イ]
- 根拠を明確にしながら自分の考えが伝わる文章になるように工夫すること。 [B書くこと ウ]
- 言葉がもつ価値に気付くとともに、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとすること。 [学びに向かう力、人間性等]

【単元を貫くめあて】 中学校1年 [B書くこと ウ] 根拠を明確にして意見を述べよう。

事例の概要（主な学習活動）

交流を通して意見を作る

- ① 身のまわりの出来事から、共感したり違和感を覚えたりした体験を思い起こす。
- ② ①について、グループで交流し、体験から導き出された自分の意見を1～2文で書き出す。
*問題の解決に向けて自分たちができることを考えたり、実際に行動を促したりする意見を書くことを伝える。

資料を集め、情報を整理する

- ③ 学校図書館やICTを活用して必要な資料を集める。
*比較や分類、関連付けなどの情報の整理の仕方や出典の示し方について理解し、それらを使うように促す。

構想メモを作成する

- ④ 集めた情報を付箋に整理し、構想メモを作成する。

意見文を下書きする

- ⑤ 交流メモをもとに、意見文を下書きする。
- ⑥ 下書きを交流し、「分かりやすいか」や「納得できるか」などの視点で助言する。

意見文を読み合う

- ⑦ 助言を参考にしながら意見文を作成する。
- ⑧ 互いの意見文を読み合い、相互評価する。
*「書き手の考えが伝わるか」「根拠は明確か」について相互評価する。

「学習の個性化」に対する手立て

興味・関心に応じた学習課題を生徒自身が設定することで、今後の学習が最適となるよう各自で調整させる。

「指導の個別化」に対する手立て

支援が必要な生徒には、中学生による新聞の投稿を保管した共有フォルダを活用させるなど、情報を制限することで学習に取り組みやすくなるよう工夫する。

資質・能力に応じ、インターネット、新聞、図書等様々な情報収集ができるよう工夫する。

支援が必要な生徒には、関連図書の活用等について学校司書の支援を行う。



「Bと判断する状況」に該当しない生徒には、共同編集機能を活用したコメントの入力など、教師による支援を重点的に行う。

「B(A)と判断する状況」の生徒にも、適宜、教師によるフィードバックを行うことで粘り強く学習に取り組ませる。

子ども一人一人に合わせた学習環境の調整や教材へのアクセスを容易にし、「個別最適な学び」を一層実現しやすくする大切な学習基盤の一つが、ICTです。

児童生徒の実態や学習内容と照らし合わせ、ICTの強みを生かした活用を検討することが大切です。

ICTの効果的な活用例



あらかじめ、関連するウェブサイトのURLをまとめておき、授業支援ソフトなどを通じて子どもたちに共有しておくことで、子どもたちは端末を活用して、必要なタイミングで必要な情報を選んで取得することができる。

個別化



画像でリアルなイメージを膨らませることができる。

可視化



ヘッドセットでそれぞれのペースで英語のリスニングを行ったり、国語の音読を聞いたりすることができる。

個別化



学びのゴールを確認したり、自身の学習過程（練習など）を録画して改善点を考えたりすることができる。

共有

保存



学級内の考えを共有することで、個々の考えを広げたり深めたりすることができる。

共有



ココがポイント！

ICTは、低学力層の児童生徒を支える視点からも活用が期待されます。一方で、学習内容全体の見通しをもたせたり思考の流れを見える化したりするのは、黒板などのアナログの方が効果的な場合もあります。ICTは、あくまで、学びを充実させるためのツールであることを忘れずに活用するようにしましょう。

授業改善の取組は、学習指導要領の着実な実施を通して、**全ての児童生徒に対し、確実に資質・能力を育成することを目指して進められるもの**です。教師には、専門家として、学習指導要領に示された育成を目指す資質・能力についての正しい理解や、児童生徒の実態の丁寧な把握、教科の特性や使用する教材に応じた単元構想及び各時間の授業づくりを行うことが求められています。児童生徒が「分かった」「できた」を実感できる＝「楽しくて力の付く授業」を目指して、本解説と併せ、以下の資料も参考にしてください。

- ・ 「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」
<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryuu.html>
- ・ 「2020からの新しい授業づくりハンドブック【小・中学校】」
<https://www.pref.oita.jp/uploaded/attachment/2226634.pdf>
- ・ 「早わかり！単元計画の作成手順」
<https://www.pref.oita.jp/site/gakkokyoiku/hayawakari-tejyunn.html>



問合せ先

大分県教育庁義務教育課

〒870-8503 大分市府内町3丁目10番1号

TEL : 097-506-5519 FAX : 097-506-1795